

巻頭言

夢に寄せて

理事長 新野 宏

初夢を見ると縁起が良いのは「一富士、二鷹、三茄子」と言われますが、今年の正月、皆様はどのような初夢をご覧になりましたでしょうか。今日は少々夢に因んだお話をさせていただきたいと思います。

日本気象学会が創立されて来年で130年になります。この間、社会は大きな変化を遂げてきました。21世紀に入ってからの10年だけを見ても、一層のグローバル化、国家財政の行き詰まり、社会の高齢化と人口の減少基調への移行、いわゆる「ゆとり教育」の影響などが顕在化してきており、社会全体を閉塞感が覆っているように見えます。このような社会の中で、会員の皆様はどのような夢をお持ちでしょうか？あわただしい日々の生活に追われて、夢を忘れてはいらっしゃらないでしょうか？気象の世界では「リチャードソンの夢」と呼ばれるようになった挑戦が有名ですが、皆様がそれぞれの研究や業務に夢を持ち、その夢に向かって果敢に挑戦いただくことは、気象学会の目的、「気象学の研究を盛んにし、その進歩をはかり、学術文化の発達に寄与すること」を実現する上で最も重要なことの1つだと思います。「直ぐにでも実現したい夢」、「ひょっとしたら実現できないかも知れないが大事に温めている夢」について、新年を機会に今一度見つめ直していただければと思います。

さて、学会自体も夢（構想と言うべきかも知れませんが）を持つことが大切です。学術委員会では2009年末に「中長期ビジョン」をまとめました。現在は、最近10年の気象学・大気科学の現状をレビューし、今後の展望をまとめる「日本の気象学・大気科学の課題と展望」（仮題）を準備しているところです。いずれ原案をお示しできると思いますので、その際には皆様の夢も積極的にインプットしていただければと思います。

国立大学の法人化以降、大型研究施設の整備が難しくなったことが懸念されていますが、日本学術会議では昨年3月に提言「学術の大型施設計画・大規模研究

計画一企画・推進策の在り方とマスタープラン策定について」をまとめました。このマスタープランの影響は大きく、既にリストの中から何件かが予算化されています。マスタープランは今後も定期的に改訂が予定されており、気象学会としても中長期的な展望にもとづいて、大型施設・大規模研究計画に関する会員のご提案を支援していくことが必要と思っています。一方、日本学術会議第3部では「理学・工学分野の科学・夢ロードマップ」を作成中です。ここでも学会の「夢」が求められており、学術委員会を中心に対応しているところです。

若手研究者が夢を持って研究できる環境を作ることは、学術団体全体が取り組むべき重要な課題です。気象学会では学術会議のIAMAS小委員会と共同で、若手研究者の実態把握を行うと共に「若手研究者問題に関する検討会」を開催してきており、今年の春季大会ではリクルートブースの設置も計画しています。幸い、若手研究者問題については徐々に社会でもその重要性が認識され始め、平成23年度には、日本学術振興会の特別研究員枠が30%程度増加し、「テニユアトラック普及・定着事業」も認められる見込みとのこと。今後も継続した取り組みを進めていきたいと思っています。

大気現象は幅広い時間・空間スケールの擾乱の重なり合いで起きること、本質的にカオスであることなどはなかなか容易ではないようです。大気科学の魅力とは何か、最新の大気科学で現象のどこまでが確かにわかっており、何が不確定なのかを、正確にわかりやすく社会に伝えていくことは、将来の大気科学を担う人材を惹きつけ、夢を与える上でも、また社会に大気科学の必要性を認識してもらい、学会の夢を実現する上でも大変重要です。

夢を実現するために学会が行うべき仕事は数多くあります。理事会や各委員会でも精一杯努力する所存ですが、会員の皆様も様々な局面でお時間の許す限りご支援・ご協力をお願いする次第です。